郷土室だより

第 14 号

昭和51年9月15日

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地 1-1-1

電 話 543 - 9025

切絵図考証 一

安藤菊二

はじめに

近年とみに市価が騰貴して、入手しにくくなった江戸の切絵図も、人文社版の翻刻についで東京堂出版から、金鱗堂版と尾張屋版の切絵図が出版されて、容易に見得ることになったのは大きな喜びといっていい。

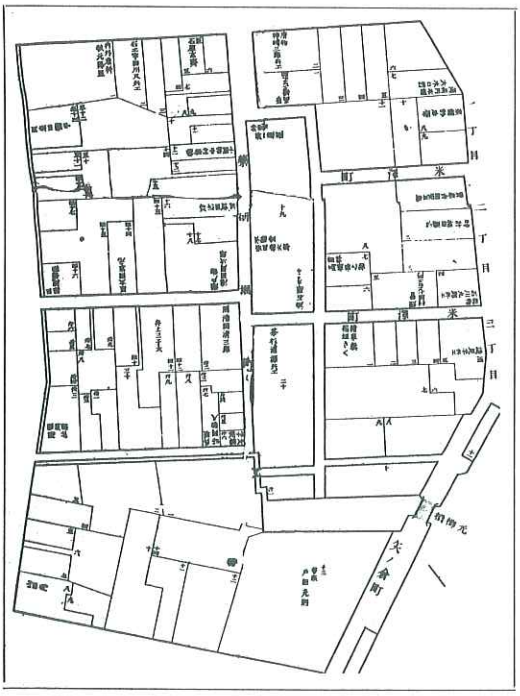
ただこの上の願いと言えば、切絵図に記された個々の人物について、もっと突込んだ説明が欲しい。もっとも、それをするには多少の年期を必要とするし、こういう仕事は誰にでも望めるというものでもない。幸い私に、いくらか暇ができたので、現在判っていることだけでも書き留めておいたら、後の人のためにいく分の役に立とうかと考えた。

第一着手として、金鱗堂版の日本橋地区の図を取上げて、矢の倉周辺の武家地から説明を進めることにする。

第1 薬研堀周辺居住の名家

切絵図の「薬研堀埋立地」の左、西方の二纏の武家地は、明治五年に薬研堀町に併入された。そこに記された人々の中で著名な人物とし

「百事便要東京分図」
明治13年 橋爪貫一刊（部分）



「日本橋北内神田両国浜町明細絵図」
嘉永3年 金鱗堂版切絵図（部分）

て、まず「林洞海」が挙げられよう。

○佐藤泰然

林洞海の居宅は、後に順天堂病院を創立した佐藤泰然が住んでいた家であった。泰然は、天保六年（一八三五）に長崎に赴き、蘭医ニーマンについて医術を学び、同九年帰って、江戸両国薬研堀に洋方外科医を開業した。

林董伯爵（松本順の弟、外務大臣）の『後は昔』の中に、この薬研堀の家について記述した文章があって、

「林の家は（佐藤泰然より、後年佐倉移転の時譲られし家）維新前は両国薬研堀の表通りにあり、地坪三百坪許にて、其大半家蔵を建て連らねたり。明治元年、静岡へ移住の時、地所家宅一切を六十円にて売払ひたり。其後十四五年頃、友人吉松なる者此辺の地を買ひたる時は、一坪百円なり」と記している。

佐藤泰然は、長崎新帰朝の蘭方医として、めきめきと売りだした。近隣には先輩シーボルト門下の竹内玄洞、戸塚静海が控えており、若松町には、時の幕医執匙、多紀楽真院法印が厳然と構えている。幕末の薬研堀は、名家大家の巣窟のような所で、明治の神田駿河台付近のごとき所であった。（鈴木要吉著『蘭学全盛時代と蘭畸の生涯』一七頁）

（「日本医学史」より）

○林洞海

「名は彊、洞海は通称、梅仙ともいった。文化十年豊前小倉付近の篠崎村に生まれた。二十一才で江戸に出て、宇田川槐園、同榕庵に蘭学を学ぶ。

二十三歳で長崎の蘭医ニーマンから医学を修めた。天保十一年、また長崎に留学、三年後、江戸日本橋薬研堀で開業した。万延元年幕府の医官となり、文久元年、奥医師となって法眼に叙された。文久三年、家茂の上洛に随行した。維新後、駿府に移り、明治元年十二月、六男紳六郎を西周に託して学ばせ、のちに西の養子にした。

明治二年三月沼津兵学校付属陸軍医学所副頭取格となる。

明治三年新政府に招かれ、大学中博士、大阪医学校々長、権大典医、四等侍医を歴任して隠退した。明治二十八年二月二日病没。年八十三。」（今泉源吉著『蘭学の家、桂川の人々』三―六〇二頁から転載）

○萩原鳳二郎

切絵図に鳳三郎と刻するのは鳳二郎の誤りであろう。古学派の儒者で、緑野と号した。『広益諸家人名録』に

儒古学　緑野　名承 字公寵 一号敬斉 会日 三八　両国薬研堀　萩原鳳二郎

とあり、『当世名家評判記』前編巻之上、経学者の部に

萩原緑野（「大日本名家肖像集」より）

上々吉　萩原鳳二郎　名承 字公寵 号緑野

頭取　大麓の二子でござります。今によく家風が衰へませぬ。父兄とちがひ詩文ことにお手がきゝます。

ワル口　何もかもいゝが、山子点の素読をよしてくれゝばよい。兎かく兼山がしみこみぬけぬそうだ。」

と評判している。「悪口」の中で言っている山子点というのは、山崎闇斎が訓点を施こした書物のことである。

●森銑三先生の「谷文晁伝の研究」によると、明治三十年鶴塾同志会の発行にかゝる、大麓・楽亭・緑野の小伝を集めた冊子があって、文化十四年に、文晁が描いた「萩原大麓」の肖像が載っているそうである。

●また、三村清三郎翁の『本の話』に「石室興斎翁は、薬研堀不動堂に寄食して、萩原大麓へ通ひたり。大麓の家は、林洞海の隣なり。」という記事が見える。

○安井算知

安井算知は囲碁の名人で、天保の頃には、第九世が薬研堀に住んでいた。伝記は、『坐隠談叢』囲碁全史巻二（平凡社、昭和一六）に詳しい。ここに転載させて頂くこととする。

「安井算知（第九世）

算知は江戸の人、安井仙知の第一子幼名を金之助といい中年俊哲と改め、後、家督を継いで算知と称した。

両国薬研堀に住し、手合の上手であった。安井家第一世から第三世にいたる墓碑は京都寂光寺にあり、宝永五年三月火災に罹って寺とともに灰燼に帰し、その後久しくこれを修めるものがなかった。算知深くこれを愁い、嘉永五年五月これを江戸深川浄心寺に改葬して、曽祖の霊を慰さめた。（碑銘省略）。

算知甄逸に失してその行動往々人をして眉をしかめしめるものがあったが本来篤実の性、然諾を重んじ、仁狭風あり、碁風は家父の慎厳なのに似ず、豪放おのずから一家をなした。

算知の碁は形よりも力において優ったもののごとく、その細に入り微を穿つ点は本因坊秀知すらもこれを畏敬した。

算知は、天保年間における碁苑四傑（算知・松和・雄蔵・仙得）の一人で仙角・仙知の後を承けて家門大いに繁栄した。

安政五年関西を歴遊し、七月八日沼津の客舎で、にわかに病を発して没した。享年四十九才。法名を峻石院算知日健居士と諡す。実子算英家を継いで十一世となる。時に十一才。」

○吉田秀哲

「御鍼師　四十人フチ。法眼」

（『天保九年武鑑』『安政六年武鑑』）

○雷権太夫（いかずち、ごんだゆう）

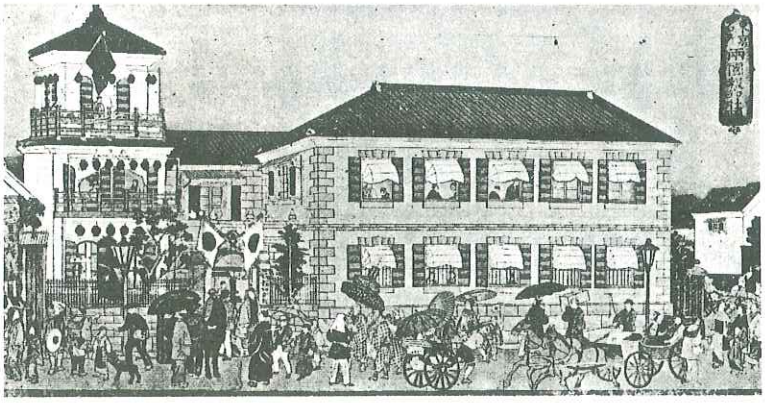
「角界の頭取（年寄）の一人。頭取は、勧進角力の事務をとり、外部との斡旋にあたり、また一方、力士の養成監督にあたる。江戸角界の年寄は、宝暦のころは、雷権太夫以下三〇名くらいであったが、弘化四年には五四名の多きを数えたという。」（古河三樹著『江戸時代の大相撲』昭和四一、雄山閣）

●明治六年に、薬研堀に完成した郵便報知新聞社の建物は、もと角力年寄雷権太夫の住宅跡に建てられた。稽古場のあった所に、印刷機を据えつけ堂々たる新聞社ができ、三階の火の見櫓が異彩を放ち東京名所の一つとして、錦絵が売りだされた。

〔参考〕

「　政治小説の元祖矢野龍渓

…次の改進党の一派は、両国薬研堀に社をおいて、今の「報知新聞」の前身である「郵便報知新聞」を出していた龍渓矢野文雄氏とその一党であった。橋町を真直ぐ行くと突き当る。其処に社があったが、それからちょっと左へ曲って更に右へ進むと、薬研堀の町名の由来する例の七色唐辛子屋が二三軒を並べてい、その他綺麗な物売る店があり、そこを行くともう両国広小路で、社の建物は、当時はまだ珍しい白壁の洋館、前に蘇鉄が植えてあった。つまり、錦絵などにもなった駿河町の三井銀行や海運橋際の第一銀行、永代橋際の日本銀行を極めて小型に真似たもので、ちょっと変っていたのと、与兵衛ずしでも食べに両国へ行く時は、屹度その前を通ったので、自分はよく覚えている。」（平田禿木著『禿木随筆』二五二―三頁）



郵便報知新聞社

○萩原近江守

「父、作之助、御小納戸衆、四百表元矢のくら」（安政六年武鑑）

吉田頼菴の上ヶ屋敷だった所で、萩原近江守は天保十三年にこの邸地を拝領した。坪数三九五坪。

『東京市史稿、市街篇三九』所収の屋敷渡預の記録中に、次の書上が見ら

れる。

薬研堀元矢之倉吉田頼菴殿上ヶ屋敷、建家立具目銀

一、門扉　但、潜り共錠鍵付　弐枚
一、戸　但、半戸共　百拾七枚
一、障子　但、半障子共　八拾七枚
一、襖　但、小襖共　弐十九枚
一、畳　但、半畳共　百四拾畳
一、植木　大小品々
一、庭石　大小品々

（下略）（三九巻、四二〇―一頁）

○水谷玄丹

『安政六年武鑑』に、一橋家奥医師と出ている。同武鑑に「やけんほり、石川玄常」の名も見えるが、切絵図には記されていない。

○堺野幸之助

『安政六年武鑑』によれば、「田安大納言慶頼卿御用人、二百五十俵」とある。

○渡辺円斎

「表御坊主衆」である。『安政六年武鑑』に、両国やけんほり、として、渡辺円斎、渡辺雪斎の名が見られる。

○加藤善庵

天保十三年版『諸家人名録』に、

「学医、詩、草軒、名良白、字善庵一号富春館、矢ノ倉加藤善庵」

とあり、『安政六年武鑑』に「御目見医師、やけんほりわかまつ丁」と見える。

●「字は良白、善庵と号す、姫路の儒医、学を好みて文思あり。江戸に至て太田錦城に学ぶ、人となり滑稽洒落にしてよく媚を取り、笑を博せりと云ふ著す所、柳橋随筆、柳橋詩話、西遊文藻、墨堤遊記等あり」（『大日本人名辞書』）

●森銑三先生の『随筆辞典』に、善庵に漢文随筆『旧聞新識』一巻が存し、上野図書館蔵『清華閣雑篇』に収められているという。

○佐竹永海

「画家、通称衛司、九成堂、周村、愛雪、幽宝子、天永、などの号があった。

会津の人、江戸に出て、谷文晁の門に入り、ついに妙手にいたり、画をもって、彦根侯に仕えた。明治七年十二月二十四日没、年七十二、谷中墓地に葬る。」（『扶桑畫人伝』『墓所集覧』）

●岡田良策編輯『明治文雅都鄙人名録』に、

画　矢ノ倉町四番地　佐竹永湖

の名が見える。試みに、明治十三年刊橋爪貫一著『東京分図』とつき合わせてみるに、安政切絵図に見える、佐竹永海の位置に一致する。（加藤善庵の旧地は三番地、次項の坂口仙得の旧居は五番地に相当する。）

○坂口仙得

『文久二年武鑑』に、「碁所、仙知弟子、坂口仙得」と見える。

「仙得は安井家の神足にして、手合上手に進み、丈知とともに御城碁を勤めたる天保四傑の一人也。

仙得の家は第七世仙角の実家にして仙徳の後なり。初め寅次郎と称し、仙角の教を受けしが、後、仙知の薫陶を受け、江戸本所亀沢町に住居す。明治の碁客阪口振太郎（三段）の父なり。

仙得の家御城碁の完備せるものを蔵す。秀和就て謄写を求めけるに、仙得答へて曰く、此書紛失を恐れ門外不出とせる故、本因坊家にして希望なれば毎日我家に来りて写し取らるべしと。乃ち秀和日々仙得の家に赴き、自ら筆を呵して遂に全部を謄写し得たと。今尚両家にこれを蔵するや否や。」

（『坐隠談叢』（囲碁全史二）一六七頁）

○船越左門

「御寄合衆、五七七石、元やのくら」（『安政六年武鑑』）

催し物のお知らせ

◇演劇講座　第4回

第一回　九月二十四日（金）
午後六時―七時半
「歌舞伎の女方――その歴史」
服部幸雄氏

第二回　九月二十五日（土）
午後一時―二時半
「歌舞伎の女方――その演技」
中村芝鶴氏

第三回　十月一日（金）
午後六時―七時半
「南北の今日性」
今尾哲也氏

第四回　十月二日（土）
午後二時―三時半
「南北と現代」
太田省吾氏

◇東京を語る会　第19回　予告

『中央区年表　昭和時代Ⅱ―準戦時体制篇』の刊行を記念して、編纂にあたられた安藤菊二氏に、お話を伺う予定です。

刊行は十一月過ぎになります。